

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第8回

私の日常⑥ 「音声交流ツール」アプリを利用する その1

アプリで展開される音声会話を聞いてワクワクする

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

はじめに

先日、手紙を郵送した方に、勇気を振り絞って

自分から電話をした。手紙と同じ内容だけど、電話を通して音声で伝えたいと思ったためだ。

電話は、難聴で聞こえにくい私にとって、相手の言葉がきちんと聞き取れるか不安にさせる。子供の頃から現在まで、電話や携帯電話を通して音声会話をしているが、ずっと苦手である。職場で電話を通した音声会話をする業務命令が出た場合や、プライベートで相手から電話や携帯電話の着信があった場合は、音声会話をする。それ以外はメール、SNSメッセージ、チャット等を通したテキスト会話を好んで利用をする。

先日電話をした方の連絡先が「住所」以外に「電話」しか知らなかった事が大きい、「電話」を通して音声会話をしようと思えるようになったきっかけは、スマートフォンにインストールするソフトウェア、「音声交流ツール」なアプリとの出会いが大きい。

アプリが私に苦手な電話をする動機をつくってくれた経緯を、数回に分けて説明をさせていただきたい。

「音声交流ツール」アプリ

との出会い

新型コロナウイルスから守るマスクを装着しても、涼しい秋風を感じる頃、同じ視覚障害のAさんからメールが届き、頭を抱えた。井戸端会議をイメージした音声交流ツールである「Bアプリ(スマホ iPhone、iOSユーザ向け)」での、Cさんのトークイベントに誘われたためだ。

Cさんの講演やワークショップに参加したことがあるので面白そうだと興味が沸いた。しかし、顔の映像も出ない音声だけの「音声交流ツール」アプリを自分のiPhoneにインストールして、音声会話に耳を澄ます自分がイメージできなかった。

好きなアナウンサー、文学者がラジオに出演する情報が流れた時、一瞬は興味を持つけれど結局は聞かないので、今回も聞かない可能性が高いと感じたのだ。

コロナ禍になってから音声会話は、感音性難聴の耳には、ますます敷居が高くなった。お互いの命を守るためのマスクを通しての会話は、母音と子音が繊維でバラバラにされたような音声に聞こえるため、お手上げだった。

オンライン形式でのトークであれば、唇の動きと顔の表情が見える状態で、音声会話を聞きたい。仕事や重要な時以外は、音声会話文化から距離を置いて、メール等のテキスト文化や、テレビアプリを通して、字幕が付く映像文化へとひきこもりたいのだ。

長くご無沙汰していたAさんから、連絡がありイベントに誘いを受けたことは嬉しかった。Aさん、Cさんの存在のおかげで知ることができたアプリは、自分からは利用する事がなさそうだったので、ご縁を感じた。

Aさんに視聴する旨を伝えて、自分のiPhoneに「Cアプリ」をインストールした。自分のハンドルネームを決めて登録して、立ち上げると英語が並んでいた。何かの広告が並んでいるのかなと思

った。使い方も、よくわからなかった。当日、トークイベントに参加ができなくても、駄目で元々だと思った。

「音声交流ツール」アプリでの

トークイベント当日

平日の昼休み、近所でお弁当を買って、アプリを立ち上げた時は、イベント開始時間からしばらく経過していた。

ふと思った。配信されるトークイベントの専用URLはあるのだろうか。Aさんのメッセージや、Bアプリを検索エンジンで調べたりして、トークイベントの入り方を調べたが、よくわからなかった。とりあえずアプリを立ち上げる。

上から下に順番に見ていくと、誘われたトークイベントのキーワード「インクルーシブ・デザイン」が入ったラウンジ名があった。

アプリをインストールした時に英語の広告だと理解したのものは、私の勘違いだった。参加予定のトークイベントのラウンジ名と、同じような位置に、英語で「一緒に喋ろう」とあったからだ。外国人も利用しているのだと思った。

こんなに簡単に辿り着くなんて、調べた時間もつたいないくらいシンプルな並びだった。

入ることに少し迷った。iPhoneの画面に、人差し指の先でタッチをしたら、中に入ることができることは直観でわかった。職場や自己研鑽で受けるオンライン研修とはちょっと気分が違う。遊びに行くような感じでもあるし、音声会話だけのコミュニケーションについていけるか不安があった。

見覚えがあるアイコンが、Aさんの写真っぽいアイコンが見えた。Aさんがラウンジに入った様子だった。私も、人差し指の指先でラウンジをタッチして、中へ飛び込んだ。

アプリの中で再会

中に入ると、二人の男性の音声会話が聞こえて、一人は懐かしい声で、Cさんだとすぐにわかった。時々、女性の声が男性二人に問いかけていたので、女性の方が司会のような様子だった。三人で、楽しそうに会話をしている様子だった。

同時に、チャット文字が下から上に流れていた。男性二人の音声会話についての感想や思ったことを、たくさんの人がテキスト文字として打っている様子だった。

Aさんが私に気づいてくれて、チャットで私に話かけてくれた。

アプリの個人登録する時、Aさんも私もハンドルネームを作って登録したので、個人が特定できないように、かつ、お互いにしかわからないような特徴をチャットで明かし合って、「私もいま入ってきたところですよ」など入力をした。

二人だけの私信チャットではなく、音声会話をしている人にも、音声会話をしていない、聞いているだけの人にも、私たちのチャット文字は筒抜けである。

使い方はわからないけれど、とりあえず、使えるものを最大限使って、お互い無事にこのトークイベントに参加できていることを、チャット文字で確かめ合った。

音声会話を聞いてワクワクする

Cさんと会話をしているのはDさんで、「音声交流ツール」アプリの開発者だ。この時点で、私がそう理解したか思い出せないが、三人は楽しそうに音声会話をしていた。

久しぶりに聞く方言、楽しんで喋っていることが伝わるような音声のイントネーション、笑い声、敬語の中に親しみを感じる言葉遣い、ツッコミ、無言の間、Cさんが喋ろうとしている時に、間髪入れずにDさんが喋るといふ、音声会話の動

きがよくわかった。

あとでわかる事だが、このアプリの音環境は丁寧につくりあげられている。なので、難聴で聞こえにくい私でも、言葉そのもの以外の音の響きが、記憶に残るのだ。

会話を聞いている人が打ったチャット文字が、継続的に下から上に文字送りされていた。一緒に話を聞いている人たちが、とても楽しんで聞いていることが伺えた。

アプリを使用する前は、音声会話がかんこえるか不安だったが、全ての音声会話を聞き取ることは難しいが、リアルな音声会話とは比べものにならないくらい聞こえた。言葉がかんこえなかつても、かんこえても、音声会話をきくことそのものに、ワクワクした。この感覚は久しぶりだなと思った。

マスクが必須になった頃から、聞き取ることが普段より難しくなり、会話を一生懸命に聞く必要があるため、会話そのものを楽しむことが、難しくなった。必要な会話以外、音声会話は避けたい気持ちになっていた。

継続的に人と人の雑談のような音声会話を聞く機会がなくなってしまったため、日本語を忘れないために、テレビアプリのドラマを意識的に視聴するようになった。

「音声交流ツール」アプリを通してだが、ドラマ以外に、久しぶりに人と人との会話、雑談を聞くことができたようで、とても楽しい気持ちになった。ほんの三十分くらいの音声会話を聞いただけで、こんなにワクワクして、仕事に戻ったあとも、楽しい気持ちの余韻を楽しむことができた。

